

令和4年度 幼児教育研修（年齢別担任研修5歳児）全3回まとめ

「子どもの発達と保育者の関わり」—5歳児の保育の楽しさを味わおう—

講師：明治学院大学 特命教授 田代 恵美子 氏



楽しくなければ遊びじゃない！

楽しめなければ保育者じゃない！

幼児期の終わりまでに育てたい10の姿につながるためには
どのような体験が必要か。5歳児の具体的な事例をもとに学びました。

事例1 鬼遊び

お助け鬼を楽しんでいた子どもたち。ある子が障地からずっと出ないでいる姿をみて、保育士が突然「10数える間に出ることにしよう！」とルールを付け足した。



<ひとことアドバイス>
子どもに「どうしようか？」と問いかけ一緒に考える時間をもつとよかったのではないかと思います。
この小さな問いかけの積み重ねが考える力を育くみ、自分たちで生活を創ることにもつながっていきます。

事例2 色水遊び

すり鉢やすりこぎ棒を使って園庭にある葉っぱを潰し、ままごと遊びをしている子どもたち。どの子どももみんな葉っぱをこすっています。それは本当にこすりたいたいものかな？



<ひとことアドバイス>
道具はそろっているけど、「こすりたいたいのがない」という環境になっていませんか？
「子どもにこんな経験をさせてあげたい」というねらいをもち、環境を準備する必要があります。自由に使える花を計画的に植えていくのもよいです。

事例3 大きな船を作ったよ

大型積み木を使って自分たちが乗れるくらいの大きな船を作り、遊びが大いに盛り上がった。すると、子どもから「壊したくない」という意見が出た。しかし、ずっと残しておくことはできない。「どうする？」と投げかけたところ、〇日までは残してそのあと壊すということになった。満足するまで十分に遊んだ子どもたちはその日が来ると盛大に自分たちが作った大きな船を壊した。



<ひとことアドバイス>
〇日までは「残したい」でもそのあとは「壊す」と気持ちの折り合いをつけ、自分たちが納得し、見切りをつけられた結果です。保育者が決めてしまうのではなく、子どもと共に生活を創る、5歳児の保育はこのような関わりができるとういことです。

ポイント

10の姿は日々の遊び、保育の中でどれか一つだけを取り出して育むものではなく、絡み合っているものです。また到達目標ではなく、保育者のチェックリストでもないのです。

小学校の先生と10の姿をもとに子どもの姿を語り合えるようになることを目指しましょう。

【ビデオカンファレンスより】

～昨日の遊びの続きがしたい！その時の保育者の関わりと配慮～

遊びの続きと言っても遊ぶメンバーが変われば、興味・関心は変わります。保育者は目の前の遊びがどの様に展開されていくかを見守り、子どもからの発信を待つのがよいか、保育者が意図をもって環境を用意し、仕掛けた方がよいか見極める必要があります。

保育に正解はないけれど、よりよくするためにはこういう方法もあるかもしれないという引き出しがたくさんあるとよいです。

保育者として子どもたちに経験させたいことは何か、遊びの読み取りは適切であるか、常に心に留めて保育をしていきましょう。

保育は何度でも仕切り直し、改善ができるもの。「今日がだめでも明日があるさ！」という心持ちで遊び理解、幼児理解をしていきましょう！

【研修生からの質問】

Q. 5歳児の体験は6年後、9年後、12年後にどんな影響を与えるか知りたい

A. 自分の幼児期の体験で何を覚えているかを振り返ってみましょう。
いかに保育者の影響力が強いのか改めて感じるはずです。保育者の一つの発言がどれだけ大切なのかを意識し、楽しい体験がたくさん記憶の中に残るように関わることを心掛けるとよいです。

Q. 就学に向けて必要なこと、身につけておきたいことへの取り組みは？

A. どんな子どもに育てたいか？どんな小学校生活を送って欲しいと願っているか？保育者がしっかりとその願いをもって保育をしましょう。

例)・社会の一員として自分で生活ができる人
・自分の言葉で思いを伝えられる人

Q. 環境を工夫していく上でどのような配慮をしたらよいか

A. 大人の手がないと遊べないという環境は見直しをしましょう。

また、物を大切にしようと思える工夫が必要です。

例)・使いたいものが高い場所にあって子ども自身で出し入れできない。

・雑然と製作したものを飾るのではなく、心が動く飾り方

【まとめ】

年長児になった途端、「クラスのみんなで」とか「グループごとに」など、難しい保育を求められ、担任も年長児クラスはこうあるべきだと意気込んでしまいがちですが、一人一人が活かされてこそその協同です。



**みんなで=協同ではない
もっと一人一人の姿を大切にしよう**

保育者は、子どもが自分はこのグループの一員で、このグループに必要な存在なのだと「必要とされている感覚」をもてるような関わりや働きかけを心掛けましょう。

【研修生の報告書より】

事例がいくつも挙げられていて、分かりやすいだけでなく、保育の楽しさも伝わった。年長の担任になると大変さや難しさを感じてしまうことが多いが、この研修を受けてこれからの保育を想像しワクワクする気持ちを感じた。

「何を経験させたいのか？」という言葉が印象に残った。この時期この季節だから毎年やるのではなく、子どもを理解した上で今日の前にいる子どもたちは何に心が動いているのかどんな経験をさせてあげたいか考えていきたい。

保育の中で環境の大切さを考え、一つの遊具を配置するにも、子どもに合った高さ、配置の仕方、子どもたちが使用しやすい数などを考えて、そこから子どもたちの学びにつながるようにしたい。